

氏名(本籍)	おお ぜき やす ひろ 大 関 泰 宏 (埼玉県)
学位の種類	博 士 (理 学)
学位記番号	博 乙 第 1,183 号
学位授与年月日	平成 8 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審査研究科	地 球 学 科 研 究 科
学位論文題目	A Geographical Study on Urban Migration in the Kanto Region (関東地方における都市人口移動に関する地理学的研究)
主 査	筑波大学教授 理学博士 奥 野 隆 史
副 査	筑波大学教授 理学博士 斎 藤 功
副 査	筑波大学教授 理学博士 佐々木 博
副 査	筑波大学教授 理学博士 高 橋 伸 夫
副 査	筑波大学助教授 理学博士 手 塚 章

論 文 の 要 旨

本論文の目的は、関東地方の125都市を対象として、その人口移動の都市による差異を反映した都市人口移動の分布パターンを抽出し、そのパターンの時間的安定性及び都市の人口移動属性と社会・経済属性との間にみられる空間関係について明らかにすることにある。

初めに、わが国経済の低成長期に当たる1980年における①人口の移動性に関する変数群、②移動人口の構造に関する変数群、③移動圏に関する変数群それぞれについて地理行列を作成し、それに対して主成分分析を施すとともに、主成分得点に基づくクラスター分析による都市の類型化を行った。それによって、移動性の高い都市は人口規模が大であり、かつ東京近郊に立地するものであること、若年労働人口の水準もこの移動性に関連すること、及び東京を中心とする同心円パターンが人口移動圏を規定することなどを見出した。これらの事柄は、1970年の地理行列に対する同様の分析による結果からも導かれ、時間的にほぼ安定していることもまた判明した。

次いで、既存の都市次元研究と都市構造研究に基づいて、人口移動を説明する都市の社会・経済的属性を選定し、これと上述の見解から精選された人口移動の属性との間の関係を主成分分析併用の正準相関分析及び回帰分析の利用により検討した。さらに、これらの分析から得られた残差の空間分布の考察から、各都市それぞれの固有する人口移動説明因を明確にした。それらの結果、全体的には両属性間に強い関係が存在し、主として人口移動に関する同心円パターンは社会・経済属性の住宅都市性によって、また、都市規模パターンは社会・経済属性の人口規模と就業自立性によってそれぞれ説明が可能であること、及び人口規模が大な都市においてはその内域での移動性が高水準であることや、東京近郊の外帯における農村の小都市においては若年労働層の転出移動が局地的説明因となることなどが明らかとなった。

審 査 の 要 旨

人口移動に関する従来の地理学的研究は一般に、都市内のような近い距離での移動とその他の長距離にわたる移動とを区別してなされていた。筆者は、これら空間スケールの異なる人口移動を統一的に説明することが重要であると考え、都市への転入移動、都市からの転出移動という地域間移動に対して都市内での転居移動を加えた

包括的な移動現象の概念を視座においた。この視座のもとで東京大都市圏を含む関東地方の125都市に関する人口移動を主成分分析，正準相関分析，回帰分析などの利用によって解明した。その結果，都市人口移動の分布パターンは，東京を核とする同心円パターンと都市規模によって規定されるいわば規模パターンとの2大要素からなっていること，及び前者は住宅都市性，後者は都市規模及び就業自立性によってそれぞれ説明可能であることを見出した。このような明確な知見は上述の視座に基づく分析によって初めて得られたものであり，高い評価を与えることができる。

よって，著者は博士（理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。